

Title	函数的価格論の認識価値 : Hans Meyer; Der Erkenntniswert des funktionellen Preistheorien (Die Wirtschaftstheorie der Gegenwart Bd. II. Wien 1932)
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.10 (1936. 10) ,p.1561(155)- 1573(167)
JaLC DOI	10.14991/001.19361001-0155
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19361001-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

でないならば、累年借財多き者が助かる筈もなく、御救にもならない。世上一般に明かに棄捐と見做したのであつて、所謂借金帳消令とも云はるゝわけである。従つてこの一件の貸借も恐らくそのまゝになつてしまつたのではあるまいか。被告久之進はその手記の最後に、「此度の一件天々御免をみゐ、まゐと云其加其濟方にて目出度奉存い」と記してゐる。しかしかうした觸書の結果は當局の「世上融通第一ニ心得、諸國共無差支、實意ニ貸借可致」の希望と矛盾するものであることは云ふまでもあるまい。

(昭和十一年九月十六日稿)

函數的價格論の認識價值

—Hans Meyer; Der Erkenntniswert des funktionellen Preistheorien
(Die Wirtschaftstheorie der Gegenwart Bd. II. Wien 1932)—

氣 賀 健 三

價值論の上に於て不朽の效績を残した所謂の奥地利學者派の一人フリードリッヒ・フォン・ウィーザーを記念する爲に、「現代の經濟理論」と題する論文集全四卷がハンス・マイヤーの手に依つて編纂刊行された。此四卷の中、最後に刊行された第二卷には、價值論に關する論文が世界各國の學者より寄稿されて居る。數多い論文の中で特に筆者の注意を惹いたのは「函數的價格論の認識價值」と題するハンス・マイヤーの論文であつた。氏は現に維納に在つて奥地利正統の價值學說を繼ぐ第一人者である。論ずる所は最近我國に於ても頻りに流行して居る函數的價格論、換言すれば價格平衡論の意義に就てである。

元來、價值又は價格の函數的説明方法は奥地利學派固有の財産ではなく、該學派が一八七〇年代の初めに所謂の限界效用説を唱導した時に、殆ど時を同じふして英國や瑞西に起つた所の數學的説明に依る限界效用説から發達して來たものである。奥地利學派本來の主觀的價值論の立前から言へば、財貨の價值は如何にして定まるかといふ問題

に對し、限界效用といふ一つの主觀的要素をば、因果論的に其決定原因として強調するのである。換言すれば、價值決定の次第を因果的に説明しようとする所に奧太利學派の一つの特質がある。此觀方は該學派の三巨頭と言はれるメンガー、ウィーザー及びベーム・バヴェルクの何れに依つても採用されて居る。否なそれ許りではない。函數的説明の先輩と看做されて居るジェボンスにしろ、レオン・ワルラスにしろ其初めの意圖は確に價格形成の原因を明にすることであつた。然るに此等の人々及び其後を繼いだ所の所謂ローザンヌ學派なるものは精巧なる數學利用の説明方法と相俟つて、價值決定の因果的解釋を排斥し、價格平衡狀態の成立をば函數的に説明することを以て満足するに至つた觀があるのである。マイヤーは、バレート、カッセル、シムペーター更に又マーシャルにすら斯様な傾向が存在すると述べて居る。(同書一五〇頁)

吾々は、奧太利學派の正統を繼いで飽くまでウィーザーに忠實を盡さうとするマイヤーが、如何なる批判を此函數的價格論に下さうとするかに興味を持つ。

先づ最初に平衡論とは何を意味するか、其意味を明確にして置くことが必要である。マイヤーの言葉を其儘借りて言へば次の如くである。

「平衡論とは、靜止狀態が達せられる場合、換言すれば、交換行爲に依るより以上の財貨の移動が最早や全く生ぜぬ場合に單一市場に於ける全財貨一切の價格、供給量及び需要量相互間に存在する所の量的關係を記述することである。斯くの如き狀態は經濟に於て、經驗的には完全に實現されることの全く無いものであり、又若しそれに近い狀態が生れるとしても常に瞬間的に止まるに過ぎぬものであるにも拘らず、平衡論は、經濟の要素が總て残らず、此狀態實現に向ふ傾向があるといふ理由を以て、價格理論の認識對象を其れの中に樹立すべきであると信じて居る

のである。(同書一五一頁)此定義は簡にして要を得て居る。種々なる相反する力と力とが衝突する時は、其間に相互に作用反作用が起り、結局は、其等の力の間に或程度の緊張感を保ちつゝ靜止する。此靜止は、外部からの別の力に依つて相對立せる力が影響を蒙る時に再び破れ、力と力の間には又もや作用と反作用の往復が始るが、次第に治まつて、結局舊と同じか又は之と異つた緊張感を以つて對立しつゝ靜止狀態に入るものである。斯様な力と力の物理的關係を經濟の方面に於て相對立する力と力との間に應用しようとしたのが平衡論である。即ち市場に現れる各種財貨の一切の需要量並に供給量の間には相反する力と力の對立があり、此對立の争ひは結局相互の間に一定の緊張を保ちつゝ、換言すれば或價格を——蓋し價格とは同時に需要者の側から見た需要の強さ供給者の側から見た供給の強さを表現するものに外ならぬ——定めつゝ、睨み合ひのまゝ靜止狀態に陥入るのである。或程度の緊張、或程度の價格といふのは、其程度から左右何れかへ寸毫程偏しても直ちに相對抗せる力の均衡が破れるといふ、恰度中心に當る程度をいふのである。此程度の價格が生れるまでは力と力とは互に影響し合ひ、影響の影響を及ぼし合つて止まぬ。然るに斯くの如き平衡狀態は現實の社會に於ては殆ど全く生じ得ないと言つてよい。何故かといふに、各種財貨の需要と供給に對して外部からの刺激が不斷に加へられるのであつて、一つの平衡狀態を生み出す時間的餘裕が與へられることは殆ど全く無いからである。

マイヤーは更に語を繼いで言ふ。「平衡論は、需要量、供給量、費用其他に對して價格程度の一義的相互的な併置を敘述することに依つて平衡狀態の構造法則又は形式法則を求めるものである。平衡の靜止狀態に相互に保持される所の要素は總て皆、同時に「與へられる」即ち存在するものと想定される、但し(數學的な意味に於て)同時的に既知のものとして想定されるものではない。如何なる要素と雖も或他のものよりも以前に與へられることはなく、此等のも

の、間には一方的な因果關係は存在せず、總ては皆相互依存的に定まり、一個の完成せる體系中の變數として互にあらゆる方面に亘り且つ相反する所の依存關係に立つ、換言すれば、一つの要素が其大さを変へる時に他の要素が總て残らず自動的に適應狀態に變つて行くといふ所謂「一般的相互依存」の關係に立つのである。(同書一五一頁)

此一般的相互依存の關係をば聯立函數方程式に依つて表現することが如何なる意義を有するかといふに、それは其表現する方程式の數が該方程式中に含まれたる未知數に等しい場合に於て、問題即ち個々の價格の高さが一義的に解決し得るものであることが證明せられたことになるといふ點にあるのである。

元來數學的證明といふものは、其證明的過程に於て、與へられたる材料以外に何等外部から添加される所なく、一定の公式に従つて自動的に行はれるものである。それ故に證明的過程即ち數式計算の經過に不注意の誤りがないとすれば、其成果の意義は、偏に該數式樹立に要せる材料如何にあるといつてよい。即ち若し其材料の内容が或は經驗的命題に矛盾し、或は相互間に矛盾を含むならば、其意義は無價値である。又若し其材料が論理的に根底に立ち得るものでなく、匿證伴争の性質を帶ぶるものである場合には、該數式は單なる表面的敘述に終り、之を意義附ける爲に更に一步根底に溯る必要がある。(同書一五二頁参照)

マイヤーは斯くの如き準備の下に數理派經濟學者として令名ある人々を年代順に其祖上に拉して來る。即ち先づクールノ(A. Cournot)より始めて、ジ・ボンス(W. St. Jevons)・ワラス(L. Walras)・パレート(V. Pareto)を経て最後にカッセル(G. Cassel)を擧げる。此各人に就てそれ〴〵詳細なる批判を加へて居る。

此一聯の批評を通觀するに、それ〴〵に共通の趣旨は此等數理派經濟學者の何れもが其所期の目的達成に成功して居らぬといふ點にある。其原因の最も根本的なものは函數的價格論が、それだけでは單に需要、供給及び價格

の量的關係を表示するのみであつて、如何にして個々の價格が定まるかといふ發生的な因果的説明を省きし、形成せらるゝ價格其物に對する説明を缺くといふことである。多數の數理經濟學者が、其初めに於て如何にして財の價格は定まるかといふ因果的な問題を設定するにも拘らず、其論證の途中に於て、函數的方程式の表現に移る時には、説明の當の目的が豫め想定せられて居るといふ頗る不完全なる證明を行ふといふことを、マイヤーは其拉し來たれる學者それ〴〵に就て指摘する。更に今一つの原因としてマイヤーの考へる所は彼等の考へる價格方程式を樹立するに當つて置く所の前提に、現實と矛盾せるものが幾つかあり、中でも限界效用均等の法則は其主なるものであるといふ。

函數方程式に依る價格平衡論が發生論的に價格形成の次第を説明するものでないことは敢てマイヤーの言を俟つまでもない。平衡論は、多數の經濟行爲者が或數量の各種財貨をば單一の完全なる自由競争市場に於てそれ〴〵相反する力を以て牽引し合ふ即ち交換しあふ時に、其處に一つの力の平衡狀態が成立し得るといふこと、換言すれば安く買はうとするものの評價と之と反對に高く賣らうとする者の評價とが競ひ合つて結局落付く所の或る高さ——即ち或價格——が存在するといふことを證明するものである。而して其證明的爲に必要な前提を経験の世界から抽象し來たり(例へば、自由競争の原則、限界效用遞減の法則、同じく限界效用均等の法則、效用代位の法則等)、此等の概念的眞理を組合せた一つの理想型である。従つて其結論は既に豫め目的として判つて居るものであり、其推論の過程は全く單純なる推理であつて何等現實の説明に就て新しく附加する所のあるべき性質のものではない。然かも平衡論に於て、平衡狀態に於て成立すべき價格を豫定して組立てられたる一聯の價格方程式は縱令ひそれが數學的に解き得るものであるとしても、決して價格其物の形成事情を説明したことにはならぬ。それは唯平衡價格成立に必要な條件を單に表現したに過ぎない。正にマイヤーの述べる通り「平衡の方程式からは、純粹に論理的な終結

の途を経て代替關係の網が導出される。が併しそれは豫め前提の中に定められて居つたものより以上に現實の認識に當然何等附加し得ないものである。(二三九頁)加ふるに平衡價格の成立が函數方程式に依つて表されるといふことは、一財の需要量と價格の間及び一財の供給量と價格の間相互間の作用反作用の關係、略言すれば需要供給間の相互依存の關係が現實世界の時間といふものを無視して總て同時的存在として表現することである爲め、價格形成の次第といふものは決して一般的平衡の方程式のみでは表現し得ないのである。

グーレル、ジェボンス、ワルラス等は其價值論を開始するに當つて何が價格を決めるかといふこと、即ち價格決定の原因を明にせんことを目指したのである。然るに其目的は不幸にして中途に於て挫折し、筆は價格平衡論に移り、若し平衡價格が成立するとすれば、それに對する各財の數量其費用は斯くであるといふ其間の關係をば函數概念を利用して一聯の方程式に表すのである。パレートやカッセルに在つては最初から唯、平衡の方程式の樹立のみが目的となつて居る。

若し平衡論のみを以て價格形成過程の説明が出来たと考へるならば、それは大なる誤りである。平衡の方程式は、説明の當の目的たる價格をば論理上豫め判つて居るものと考へるのである。而して式では同時的に與へられるものとして函數に依つて表現するのである。若し之に依つて因果的な説明を爲し得たと考へるならば、それは所謂「隠證伴争の誤りを犯すもの」と言はれるであらう。マイヤーの強調する様に「平衡理論の中には、同時的でなく發生的時間的順序に従ふ所の大きさをば同時的に存在するものとして聯立方程式の中に相組合はせるといふ内在的な擬制」(二八三頁)が潜んで居るのである。平衡論を説くに當つては常に之を忘れてはならぬ。然るに發生的現象は其儘で、其本質に屬するものを何等失ふことなくして靜的に靜止現象として之を理解することは出来ぬ。數學的平衡論が表

すものは、結局平衡狀態に達する運命にある所の互に衝突し合ふ力が、若し其狀態に達するとすれば其場合に個々の財の價格、其需要其供給其費用等の間の關係は何うであるかといふ其關係の假定的な有様に過ぎないのである。斯様な表現は、勿論、價格、需要、供給の量、其費用等の相互依存の關係を明示する上に於て頗る有効であり、價格形式に關する吾人の理解を深めるには大に役立つに相違ない。併し之は説明の唯一のものでもなければ、又最も根本的なものでもない。

然らば數學的平衡論に於て欠くる所のものは一體全體何であるか。それは平衡論の言葉を用ふれば函數の形式である。函數の内容である。財の需要、財の供給、財の價格相互の間に函數的關係が在るといふだけでは不充分である。其函數の内容如何が判らなくては平衡價格成立の所以は充分説明されたと云へぬ。限界效用説の言葉で之を言へば、效用と價值、價值と價格の發生的關係の説明が附加はらねばならぬ。價格形式の此動的狀態の一面を裁斷して、之に理想型的工作を加へたものが價格平衡理論であるに過ぎない。それは因果的發生的研究方法に附加すべき補助手段に過ぎぬと見てよい。マイヤーは次の如く述べて居る。

「價格形成過程の問題といふ、よりも包括的な(動的)問題の解決が成功せる曉に於ては、其時既に、價格(交換關係)限界效用及び交換されたる財貨量の各個人間に於ける相互的適應關係といふものは暗に必然的に與へられて居るのである。といふ譯は外でもない。其到達せる平衡狀態に於ける價格關係なるものが、全體の過程中の唯一面、最後の一面を示すに過ぎぬものだからである」。(一八八頁)と。

筆者は勿論奧太利學派本來の價值及び價格の理論が完全であつて、均衡論が裝飾的な補強手段に過ぎぬものとは考へない。價格の形成を發生的に説明する場合には何を以て價格決定の根本原因と看做すかといへば、一方に於て

主觀的要素として人間の價值評定、又は價值函數、他方に於て客觀的要素として根本的生產手段（土地勞働及び資本）の存在量をば與へられたるものとして擧げるのが常である。更に此外に一定の生産技術又は數學派の所謂技術的係數をば既知のものと想定するものもある。併しながら少しく省るならば、需要の側から觀て根本需求たる人の評價も、將た又供給の側から觀て根本要素たる生産手段の一定量も、決して不變のものでもなければ又價格の影響を受けぬものでもない。個々の財貨の價格の變動は一方に於て需要者の評價に變化を來たさしめ、他方に於て或る生産手段の供給をより有利又は不利ならしめ、其供給量に變化を惹起せしむるに相違ない。技術的係數にしても價格變動の影響を蒙るものであることは勿論である。

然らば如何なる故を以て人の主觀的評價と生産要素の存在量とを以て價格決定の根本原因と看做すのであるかといふに、因果的に見て此兩者が經濟理論的に溯り得る究極のものであるからに外ならぬ。論者は或は問ふかも知れぬ。價格と評價と生産要素存在量との間に相關的關係があるにも拘らず因果的に見ることは論理上許されることであるかと。吾人は勿論肯定の言葉を以て之に答へるものである。其理由は次の通りである。

先づ第一に現實の經驗的事實は常に因果の範疇に在る。因果律の支配を受けずに發生するものは無い。縱令ひ現實世界のあらゆる現象が常に互に他に影響し合ひ、所謂るもちつもたれつの關係に在るとしても、其發生の順序は常に時間的順序を経、一方を因とし、他方を果として生起する。互に作用と反作用を及し合ふ所の現象は、例へば兩端に或重量を載せた天秤が最後に或釣合を保つて安定するが如く結局或均衡の狀態に安定するものである。價格論上の平衡價格とは、經濟的の諸々の勢力の作用反作用が其反覆の結果最後に到達すべき斯様な安定の狀態をいふに外ならぬ。此安定の狀態を表現するには函數概念を利用せる聯立方程式は正に頗る適切である。併しながら此表

現は決して因果的發生を排斥するものでもなければ又之と矛盾するものでもない。相互依存の關係を表す函數方程式は、相對抗する諸々の力が互に他に對して因となり同時に果となつて居る關係を表現して居るが、之は時間的順序といふものを省略せる函數方程式の特徴であつて、現實の事象の因果的生成と決して矛盾するものではない。

然らば、相互的に影響し合ふ所の價格、需要供給の三つの力の中何故に價格のみを果とし、需要の力と供給の力を因としたかといふに、それは價格其自體の中に需要なり供給なりを動かす所の内在的な力といふものを持つて居らぬからである。之は平衡價格の成立した場合を考へて見れば容易に判る。此狀態の下に於ては、價格は全く安定して居つて自ら變動する力を持たぬ。といふのは、價格なるものが財と財との交換比率即ち單なる關係を表すものに過ぎぬから次第當然のである。力と力との間に保たれてる或釣合の關係を動かし得るものは關係其自體ではあり得ない。二つの重量を釣はせて居る天秤を變動せしめ異なつた釣合へ移すものは釣合自らなし得ることなく、其天秤の兩端にある、重量の何れかに増減の起ることである。之を財と財との交換比率の釣合關係に就て言へば、何等かの財に對する需要又は供給に變化が起ると其釣合つた交換比率が破れて別の平衡狀態へ移らうとする相關的運動が起るのである。故に運動の順序から言へば、需要又は供給の上に或變化が先づ起り、然る後に平衡價格への作用反作用が始るのである。換言すれば、價格の變動、並に形成は、需要又は供給の側の變化の結果として生ずるものと言つてよいのである。

更に其處で經濟理論上から見て、需要と供給との最も根本的なものは何かといへば、需要の側に於ては、人々が各種の財貨に對して有する欲望の大きさと強さ即ち財貨の效用と效用函數とである。此欲望なり欲望の強さなり其物に關する研究は經濟學の範圍外に屬する。經濟學は人間が其欲望満足の爲に、比較的稀少なる財貨の獲得に合理

的努力を拂ふといふ事實から出發するものである。それから又供給の側から言へば、人間の欲望満足の爲に供給される財貨にして、生産の究竟の段階に溯る時に發見される所のもの、即ち、經濟理論的により以上の生産要素に分解し得ざる所の根本的生産段の存在量が一切の財貨供給の根源を爲すものである。

斯様な意味に於て、價格決定の原因として以上の二つの要素を挙げ、此要素から價值、費用、價格の形成を因果的に説明して行くことは、蓋し價值論及び價格論の根幹を爲すものと見てよいであらう。

尙ほ次に、平衡論は經驗的事實に反した假定の上に立つと言つてマイヤーが非難した中で、彼は特に挙げた所の限界效用均等の法則に就て一言述べて置きたい。欲望に關する此法則は限界效用遞減の法則に次いで平衡論に於て最も重要なものであり、之が虚構であるといふ場合には、彼の精巧なる價格方程式は其有力なる基礎を失なつて崩潰の危きに瀕するに相違ないのである。吾人の觀る所を以てすれば、此法則に關する限り、マイヤーの所説は正鵠を得たるものと言ひ難く、説明の仕方よりする誤解と思はれる。限界效用均等の法則とは、人が一定額の所得を以て其欲望満足の爲に財貨を選択するに當つて、最後に得たる一單位量の財貨から得る満足は何れの財に就て見ても均等であるといふ原則、換言すれば、所得の割當てが各種財貨それ〴〵に對して行はれ、其増加又は減少は各種財貨それ〴〵の少量の増加又は減少となるといふ原則である。然るにマイヤーの説く所に依れば、現實の吾人の經驗に於て、所得の増加にしても減少にしても、それが従前の各支出部分へ均等に影響することは殆ど無く、支出部分の或るものは増加し或るものは減少するであらうといふ。例へば所得が増加したからと言つて砂糖なり鹽なりの消費量が増加するとは限らぬといふのである。然りとすれば此經驗に反した法則は一つの虚構に過ぎないとマイヤーは言ふのである。又此法則を純粹に心理的に解釋して欲望満足感が各財に就て均等に爲る爲めには、人があらゆる欲望

の強度に就て同時に知つて居り、且つ同時に満足するのでなければならぬが、相互依存關係に在る斯様な欲望の同時的決定は到底現實に行ひ得ない所である、といふのがマイヤーの意見である。マイヤーの言ふ言葉は正に其通りに違ひないけれども、それは決して限界效用均等の法則の非現實性を證明することに爲らぬと思ふ。人が増加所得をば從來の支出部門それ〴〵に分けて支出することは必しもないといふことは眞實である。併し該法則は又必しも均等に割當てゝ支出することを要求するものではない。此法則は、人間の所得の支出には一定の順序があつて、其順序は各財の限界效用に依つて定めるといふことを表現するものである。人は可及的多大の欲望満足を欲して誤りなく行動するならば、最後に支出せる一單位量の限界效用は従前に投じたる何れの單位量のそれよりも大いことはない筈である。而して若し、各財の限界效用が一單位量の増減に連れて極微少宛反對の方向に變化するとすれば最後に投ずる一單位量が従前の何れよりも大なる限界效用を生まぬといふ事實は同時に其場合に於て各財の限界效用が均等であることを意味するであらう。實際に於て如何なる財の限界效用も量の變化に應じて微少の増減をするとは限らないが、兎に角それが量の増加に應じて遞減するといふ事は事實と考へてよいであらう。然りとすれば之を法則として理想型的に描出し、數又はグラフを以て之を表現する場合には各財の限界效用の變動を連續的なものと想定することは決して論上理の誤りでもなければ又現實に矛盾する假定でもないであらう。

所得の變化は支出割當ての均等な變化を起すことはマイヤーの言ふ通り殆どないといつてよい。従前の倍額の所得を得る者が従前の支出のあらゆる部分を倍にすると考へられぬ。併し限界效用均等の法則は斯様なことを説くものではない。所得が倍になつては或は又半分になつても、人にはそれ〴〵過去の智識經驗趣味其等よりして一定の需要の體系を持ち其一定所得の支出に際しては常に得らるべき限界效用の高さに應じて選擇を行ふといふことを

説くのである。此選擇を完全無欠に行ふ爲には、あらゆる欲望の種類と強度と相互依存の關係を同時に知り同時に決定することが必要かも知れないが、斯様な完全さを現實の人間の行動に要求することは無理であり、斯様な完全さを表現する所の數量的表現は、唯々斯様な方向に向つて行動しつゝある人間の傾向を法則化、理想化するものに外ならぬのである。斯くの如き次第であつて見れば限界效用均等の法則が經驗的事實と合致しないといつて之を虚構呼ばはりするマイヤーの意見は些か見當はずれの觀無きを得不いであらう。

以上に於てマイヤーの論文に關する紹介と批判を終る。最後に彼が此論文に依つて結局何を旨指したかを彼自身の文章に依つて紹介して置かう。

「平衡理論が示す所の空中に浮動する體系は、需要といふ動的要素の必要欠くべからざる挿入を俟つて……初めて現實との接觸が許されるであらう。若し此處に於て種々なる財貨に對する各個人の需要の關係を確證する經驗的法則が設定されるならば(それは『心理的な』法則以外のものではあり得ない)、之に依つて、體系の『動態化』現實の價格形成過程との關係が樹立されるであらう。が併しそれと同時に勿論問題は單なる函数的關係から因果的關係へ移行するであらう。ジェボンズ、ワルラス及び自ら確認して居らなかつたとは言へ、バレートも亦、心理的因果的下層工作を以て(效用函數又はオフエリミット函數、無差別線及び限界效用均等の法則に依つて)之を試みたのである。併しながら彼等は何れも中途に停り、而して或る別の、一見容易に目的に達しうだが眞實の所別個の控へ目の目的に導く途を取つて満足してしまつた。クルノやカッセルは最初から此途を歩んだのである。即ち、全體系の動力たる需要は『有效需要』と爲り、『有效需要』は『交換』と化して仕舞ふ。之が爲め動力は其本質を剝奪され、變數として體系中の或他の大さの函數と爲る。之に依つて體系の動態化否定は實行され、因果律は排除され、一般的相

互依存性が救助される。勿論、現實の移動發展の現象の説明の爲に體系を有意義ならしむることは之を全く斷念するといふ代償を拂ふのである。」(二三九a—b頁)と。